震災遺構公園「震災メモリアルパーク中の浜」の活用

The Plan for Use of the Tsunami Memorial Park NAKANOHAMA

櫻庭　佑輔*
Yusuke SAKURABA

１．震災メモリアルパーク中の浜

三陸復興国立公園「震災メモリアルパーク中の浜」（英語表記「Tsunami Memorial Park NAKANOHAMA」）は，自然の脅威や震災の記憶を後世に伝える場として 2014 年 5 月 24 日に開園した。東日本大震災前，中の浜は海岸部に隣接する緑豊かなキャンプ場であった。2011 年 3 月 11 日，中の浜には 15 m を超える津波が押し寄せ，キャンプ場の施設やみどり豊かな森が失われた。震災メモリアルパーク中の浜は，被災地で最初に開園する，被災した施設を被災したときのままに見せる「震災遺構」の公園である。

２．施設の特徴

津波を体感できる仕掛け

この震災遺構公園には，５つの「震災遺構」がある。鉄筋コンクリートのトイレ棟と，炊事棟が破壊され，直径 60cm もある巨木が引きちぎられている様子は，津波の強烈な破壊力を感じさせる。高さ 17.3m の位置で樹木に引っかかっている漁具（うき）を見上げると，津波が駆け上った高さがわかる。本公園のエントランスには，中の浜の隣にある女遊戸（おなっぺ）浜の，破壊された防潮堤の一部がオブジェとして飾られており，「防潮堤があるからと安心するな。避難することが第一」というメッセージを投げかける。「展望の丘」に登れば，目線を津波と同じ高さの約 15m に置くことができ，普段は陸地である広大な範囲が津波に没したことが一目でわかる。また，東日本大震災の大津波以外に，明治三陸地震津波（1896 年），昭和三陸地震津波（1933 年），チリ地震津波（1960 年）の津波高を示す目印が掲出されており，三陸が大津波の常襲地であることを感じさせる。公園周囲の斜面には，そこを駆け上がった津波の高さを示す目印（最大高 21 m）が付けられており，より高台へと避難する大切さを訴える。

３．施設の活用

展示の工夫

展示及びリーフレットは，セルフガイドとして活用しても理解しやすい内容とするよう心がけた。また，被災地で活動している「震災語り部ガイド」の案内においても活用してもらえるように，彼らの意向を聞きつつ，震災に関連するトピックをちりばめている。

丘から見下ろす展示広場の地面には，世界に伝播した大津波の様子が分かる大判の世界地図を配置し，この津波が世界にも影響を与えたこと，世界から支援が行われたことを伝えている。また，津波の脅威に対する正しい認識のためには，津波のメカニズムに対する科学的な理解という側面も重要である。そのため，津波の伝播速度を乗り物に例えて示す模式図，波高と遡上高の違いを説明する図など，小学生の子どもたちでも見て理解することができるような展示を行っている。

語り部による伝承

津波常襲地である三陸では，これまでも悲惨な津波の歴史を語る人たちが紙芝居，朗読などの活動を行ってきた。宮古市では津波の被害が甚大であった田老地区において，（一社）宮古観光文化交流協会が「防災学習」を展開している。

一方，震災メモリアルパーク中の浜では，一般観光客にとっても魅力的な震災遺構を活用した「地域ならではの観光メニュー」を提供することを目指している。具体的には震災メモリアルパーク中の浜のある女遊戸（おなっぺ）集落の住民によるガイドプログラムを試行し，過去から今回に至る大津波の話，漁業の話，アイヌ語源の女遊戸（おなっぺ）という集落の成り立ちや歴史の話を伝えている。先祖代々の住人の視点から見た「この土地」ならではの「逸話」であり，今そこで生きている住民が伝えるからこそ説得力を持つものである。また，浄土ヶ浜ビジターセンターの自然解説やみちのく潮風トレイルのトレイルウォーク，三陸ジオパークのジオガイドとの連携など，周辺の資源利用と一体となった厚みのあるプログラムの展開を関係者間で模索しているところである。

地域を活かし，地域に活かされる施設へ

地域の復興は地域住民が主役であり，地域住民が積極的に地域振興活動を担うことによって成されるものと考える。震災メモリアルパーク中の浜の地域住民によるガイドプログラムの展開は，今まで連携が十分とは言えなかった「地域住民」と「地域に所在する民間事業者」が手を組み，国立公園施設の活用の方法や計画などを考え，協働して観光振興を進めるモデルとなる。ここでは，窓口機能を周辺の宿舎事業者「休暇村陸中宮古」が担い，ＰＲを地域に頻繁に出入りする旅行会社がツアーを企画するという形で行い，インタープリターを地域住民が担うといった形で「既にある人や資源」を「繋げる」ことで施設の活用を図ろうと試みている。

こうした形は，追加投資があまり要らないため，プログラムの独自性が高ければ民間事業者も乗り出しやすい。一方で地域住民に対しては，参画する際に生じる物理的及び心理的ハードルを下げるため，ワークショップなどで「対話」をしっかり行うことが重要である。また，対価をいただくことが地域住民の参画意識を上げるために重要であり，プログラムにお金を払って参加してもらう環境を整備するためには民間事業者からの真摯なアドバイスが必要とされる。

これらの一連の作業は日本の国立公園においてパークレンジャーが古くから行ってきた協働体制の構築作業と同質なものといえる。地域住民を含めた関係者間の連携を促し，国立公園施設を活用したその土地ならではの売れるプログラムを作るという試みを，これからも地域の人々とともに挑戦していきたい。

展望の丘の上で津波の高さ（15m）を体感する。

*環境省東北地方環境事務所宮古自然保護官事務所